

なるほどジェンダー パネル展

「なるほどジェンダー」

パネル展

と

「女はみんな生きている」

映画会

日常生活に見られるジェンダー、かわいらしくユーモラスに描かれているパネルは、切実さ、鋭さを感じさせるイラストばかりです。

職場での問題も尽きません。

「働く母親に厳しいのは誰？」
— 反対するのは夫だけではない。「母親」の役割を持つ女性が仕事を重視するとき、肉親を含め同じ女性から非難される様子を描いています。

「女性は昇進を望まないってホント?」「働く女性は増えたけれど…非正規雇用の7割は女性」
一方、「子育て支援もやっぱり」女の役目「!?」子育ての悩みを抱える女性。助けてくれるのは温かい女性のネットワーク。しかし無意識のうちに男性の入り込む余地をなくしてはいないでしょうか。

「男性の子育てを阻む周囲のまなざし」「育休はあるけれど…取得に理解のない企業風土」

家族団欒の影には、こんなコトも…

「年末年始 家族みんなで過ごすお正月。のんびりしている皆の世話をするのは誰?」

視点は社会にも及びます。

「車内は女性のハダカで花盛り」「アイキャッチャーは若い女性に限る!」「アシスタントは飾り物」(女性)!

その原因は、

「男性優位のマスメディア」であるからではないでしょうか。業種は違えど、状況は変わりません。

「農業の担い手は、女性」(なの)「…」現在の日本の農業は、多くが兼業農家です。それを支えているのは、勤め人ではない「女性や高齢者です。しかし意思決定に携わる農協役員は大半が男性です。」「政治は女の出る幕じゃない?」

そんなことを言っているから、

「男女の賃金格差は先進国随一」
なのです。

将来の改善を担う子どもたち。しかし今の教育では、幼い頃から偏ったジェンダー観が身に付くことが助長されがちです。

「女子は言いにくい! 給食のおかわり」「女の子は理科が嫌い!」

このように今回のパネル展では、家庭内、学校内、企業内、社会内に見られる問題を、広範囲にわたって取り上げました。

(出所:「」の部分は、財団法人 日本女性学習財団作成パネル『なるほどジェンダー』より引用)

映画会「女はみんな生きている」

(2001年 フランス)

平凡な主婦としての生活を送る主人公が、目の前で瀕死の重傷を負った娼婦の世話をしていくなかで、知らなかった世界、新しい生き方を見つけていく姿を描いた作品です。

闇の組織に追われる娼婦を救ったのは、女性のネットワークと心の触れ合いでした。それに対して、女性の力を見くびっていた男性たちは、皆手ひどいしっぺ返しを食らうこととなります。

テンポの良いサスペンスコメディといった趣のなかに、フランス社会が抱える移民問題や、性産業の問題、さらには家族の姿とは…といった多くのテーマが盛り込まれた秀作でした。

このようなパネル展、映画会といった企画を通して、男女平等参画へのさらなる関心の高まりが望まれます。

なおこの記事は、平成19年12月9日に西東京市民会館で行われた「第7回西東京市男女平等参画推進フォーラム」における、パネル展及び映画会についてまとめたものです。